

事業計画書

事業名	SAKU-ORIプロジェクト	
重点テーマへの該当	有 テーマを記載	
	無 ○	
実施箇所		
実施期間	事業開始予定年月日	2020年5月1日
	事業終了予定年月日	2020年3月31日
	<p><事業の目的></p> <p>日本の養蚕業の主産地として、信州では、繭の集散地として、上田市は蚕都と呼ばれた。女性にとって機織り技術習得がお嫁に行く重要な能力でもあった時代背景から昭和初期まで地域慣習でもあった。1940年には絹の代替品としてナイロンが発明されたことや戦災もあって日本の養蚕業は、ほぼ壊滅に至ったが、幸いにも佐久地域では戦災も少なく、1950年代には養蚕が再び盛んとなり、着衣の流通も盛んでないこともあり、裂き織（ぼろ織）による機織りで家族の着衣を作る風習が残った。農家では主婦の背の高さに合わせた機織り機が各家に設置され、機織り文化が佐久地域に最近まで醸成されることになった。</p> <p>その当時機織り機を使っていた方々は亡くなったり、高齢となり、機織り機は不必要となったため、各家庭では見向きもされず廃棄されることが多くなった。</p> <p>有限会社岩崎呉服店は不必要な機織り機を譲り受けたり、安価に購入を行う等で佐久地域の顧客の家々をまわり、機織り機45台を収集した。これら機織り機を使用した方々の想いも全てではないが取材済みである。古い機織り機を継承するだけでなく、かつて使用した方々の想いを現在の織子が物語として紡ぐことで佐久地域文化を深めたい。この機織り機を使うためには、約半分29台分は部品が欠落していたり、一部修理が必要な状態である。</p> <p>平成になり、佐久地域では趣味活動の一環として自宅で機織り機を設置する人も多くなり、内山地区では「内山機織りの会」・岩村田地区では「機織りを伝えていこう岩村田宿の会」の地域活動も盛んになっている。しかしそれら地域活動も織機が手にはいないこと、設置場所確保に課題がある等問題を抱えている。</p> <p>本事業は、佐久地域の「大正・昭和の生活」に必要であった裂き織技術を復活・リニューアル、機織り愛好グループや個人愛好者を中核に公民館活動を通して地域文化とすることを目指している。観光にも活用、伝統技術を体験宿泊する「伝泊」施設（内山地区、旧岩崎邸）において、佐久地域住民と都会住民とのコミュニケーションを図るとともに移住等促進にも資する取組である。</p>	

事業概要

<事業の内容>

STEP-1：機織り機修理・欠損部品補充事業

29台の織り機の欠損部品を取り揃え、メンテナンスする

時期：R2年7月からR3年2月まで

場所：内山地区 民家

規模 機織29台改修、金額871.2千円（消費税込）

方法：織り機大工柴平忠春氏（84歳）と若手の大工他により修理

STEP-2：機織り技術の伝承事業

① 織り機組み立て技術をもつ柴平忠春氏（84歳）から若手大工・指物師他へ技術伝承（2回程度）

② 経糸張りや裂き織技術をもつ望月多恵子氏（65歳）から、若者を中心とした市民（若手織り子）を募集し、技術を伝承（2回程度）

③これらの伝統技術の保全の様子を撮影し、今後の技術伝承のために活用する。

時期：R2年7月

場所：内山地区 民家

規模：織り機組立技術は数人

機織り技術は20-30人規模（市内から募集）

金額286千円（消費税込）

方法：組立技術は実習形式。

機織り技術（経糸張り含む）は講演・実習形式。

それぞれ技術保持者の技術継承目的で映像保存する。

<達成目標>

STEP-1：機織り機修理・欠損部品補充事業

29台の織り機の欠損部品を取り揃え、現状活用な状態である16台加えて合計45台の織り機を地域住民が使える環境が構築できる。

来期以降事業であるが、伝泊施設（内山地区、佐久織のセンター機能をもつコミュニケーション施設）に10台、岩村田10台、市内の他地域4か所（場所は検討中）、各4台で16台を設置し、地域における文化活動に活用いただける体制を整備したい。

残り9台は地域老人ホームや佐久大学（地方の伝統文化機織りを生かした健康づくり）で、認知症対策作業療法等に活用いただけるよう計画している。

STEP-2：機織り技術の伝承事業

織り機のメンテナンスと組立技術保有者である柴平忠春氏（大工84歳）の技術を映像等により保存することができる。また技術継承として若手大工や指物師への技術伝承ができる。これにより、今後の佐久での織り文化の下支え（機織り機の維持）の仕組みが構築できる。

柴平氏とあわせて織りマスター望月多恵子氏（65歳）の裂き織技術も映像として保存される。また、市内の若手の皆さんに技術が伝承されるとともに、織り地域グループ「内山機織りの会」「機織りを伝えていこう岩村田宿の会」等の関係団体との交流を通じ、裂き織文化の担い手となり、後世に文化が保存されていく。

<広報表示の方法（佐久市まちづくり活動支援金事業である旨の表示）>

公開講座開催時には、演題と共に『佐久市まちづくり活動支援金事業』と表示広告を行い参加者全員に広く認知して頂く。

・事業遂行時に信濃毎日新聞等マスコミに紹介記事掲載時に『佐久市まちづくり活動支援金事業』の活用により推進と記載して戴く。

・地域コミュニティー誌「内山だより」や佐久新聞に記事掲載時に『佐久市まちづくり活動支援金事業』の活用により推進と記載して戴く。

<重点テーマに該当する場合 該当する理由（アピール）>

年間計画	4月	
	5月	29台の織り機の欠損部品を取り揃え
	6月	
	7月	織り機メンテナンス 機織り技術の伝承事業 ・組立技術 (2回程度) ・経糸張りや裂き織技術 (2回程度) ・映像保存 (1日)
	8月	
	9月	
	10月	
	11月	
	12月	
	1月	
	2月	
	3月	



<p>地域や社会にどのような利益がもたらされるか</p>	<p><「公益性」の視点> 裂き織等の織り技術や織機組立技術やメンテナンスノウハウを記録・映像化することで佐久地域全体に保全可能とする。佐久地域市民が織物活動を更に盛んに行うこと、市民文化活動が公民館活動等で定期的に行われることで、最終的には「佐久織」を有形民族文化財に登録することも視野にいられている、文化財保全活動である。</p>
<p>どのような点に独自性や工夫があるか</p>	<p><「発想の豊かさ」や「創意工夫」の視点> 佐久地域から集めた45台の織機を修理使用可能とし、機織りを指導できる人材を育成、情報発信を積極的に行うことで「裂き織り＝佐久織り」と「佐久市」の知名度を向上するとともに、佐久市の伝統的な機織り体験と宿泊が出来る「伝泊観光」の環境整備が出来る。</p>
<p>市内へどのように取組が波及していくことが見込まれるか</p>	<p><「波及効果」や「発展性」の視点> 整備できた織機は既存の岩村田教室10台を除き、来季以降に佐久市各拠点（野沢・白田・浅科・望月が候補）4か所に各4台設置して、市内各地で市民が機織り文化活動を楽しむ、生き甲斐と健康づくりにも資する取組でもある。</p>
<p>活動を継続するためにどう取り組むか</p>	<p><「自立性」の視点> 織り機のメンテナンスと組立技術保有者である柴平忠春氏（大工84歳）の技術を映像等により保存することができる。また技術継承として若手大工や指物師への技術伝承ができる。これにより、今後の佐久での織り文化の下支え（機織り機の維持）の仕組みが構築できる。 柴平氏とあわせて織りマスター望月多恵子氏（65歳）の裂き織技術も映像として保存される。また、市内の若手の皆さんに技術が伝承されるとともに、織り地域グループ「内山機織りの会」「機織りを伝えていこう岩村田宿の会」等の関係団体との交流を通じ、裂き織文化の担い手となり、後世に文化が保存されていく。 上記により、機織りの担い手が増え参画者が増えることで、当会活動の活発化する。</p>
<p>翌年度以降の活動内容概要</p>	<p>来期以降事業であるが、内山の伝泊施設に10台（伝泊施設は佐久織のセンター機能としてコミュニケーション施設を兼ねる）、岩村田10台、佐久地域全域に新設4か所*各4台で16台が市民文化活動に、残り9台は地域老人ホームや佐久大学において認知症対策作業療法等々に活用する計画である。</p>
<p>事業の最終目標</p>	<p>内山岩崎邸（築100年古民家）に設置する10台の機織り機を使い、上記以外のグループ以外の機織りを楽しんでいる方々や各拠点で新たに機織りを学ぶ方々にも、機織り技術高度化や新たな織り研究を行うことで、将来「佐久織」を佐久地域の文化として認定を受け、有形民族文化財登録を目指すことも視野に入れている。</p>

特記事項